えくてぶん

10
立川と語ろう　立川に生きよう
October 2004
écoutez bien Vol.23 No.239

表紙の人／岩部定男（一番町）　写真／細江英公

げんき産直野菜は味方 3

ホクホクのナス科

【じゃがいも】

「大地のリンゴ」と呼ばれるほど栄養価の高いじゃがいも。
最近注目のファイトケミカルも含んで、ガン予防が期待される。
〈芋科〉かと思いきや、ピーマンやトマト同様、ナス科の野菜だというから驚き。

調理指導：須田享子
写真：五来孝平

じゃがいものビタミンCはでんぷんに守られ加熱しても失われにくい。カリウムや食物繊維は生活習慣病に効果的。ファイトケミカルはポリフェノールの一種、クロロゲン酸で、細胞の突然変異を予防してくれる。いいことずくめのじゃがいもを、今回は銀あんでトロリとくるんだまんじゅうにしてもらった。芯には海老が入り、プリッとした歯ごたえが食感に変化を与えてくれる。おいしいなぁと心から思える一品。

幸町直売所地図

立川市幸町1-14-1
TEL 042-536-2439
営業時間
12:00～18:00
定休日
日曜・祭日
（2月～4月は休業）
販売品目
野菜・果樹・花など

「揚げるのがいやだと思うかもしれないけれど、簡単なのよ。全部一度火が通っているからまわりがカリッとすればそれでいいの」と須田校長。家庭料理は手軽なのが一番だ。

高橋正直さんと正士さん（一番町）

10月に入ると、幸町の直売所に秋の味覚が充実してくる。果物や芋類、葉物など暑い盛りを越して育った野菜が並ぶ。

「片手間じゃできないですよ。気配りができなかったら野菜は全滅ですからね」と一番町の高橋正士さん。お父さんの正直さんと一緒に畑に出る。この夏は乾燥が激しくて一日中水まきをしていたこともあるという。カリフラワーや年明けのブロッコリーの苗植えに忙しい。

鳴島歳典さん（上砂町）

上砂町の鳴島歳典さんの畑には、インゲンや大根、白菜がきれいに並んで植えられている。本格的に農業を始めてまだ2代目だそうだが、年間を通してなにかしら収穫している。立川の農業は、すごい。

●じゃがいもまんじゅう銀あんかけ

上品なのにボリューム満点なレシピです。

レシピ

材料（4人分）

じゃがいも　300g
a　卵白　1/2個
　片栗粉　大さじ2
　えび　小4尾
b　酒　大さじ1
　塩
　砂糖　各少々
　水溶き片栗粉
小麦粉　溶き卵　あられ　適宜
ししとう
揚げ油
c　白髪ねぎ　少々
　ゆず七味唐辛子　少々
銀あん
d　だし　360cc
　酒　大さじ4
　みりん　大さじ2
　薄口しょうゆ　小さじ2
　塩　少々
　片栗粉、水　各小さじ2

作り方

1 じゃがいもは皮をむき、乱切りにして水にさらす。
2 水気を切った(**1**)にだしを1カップ入れて煮、しょうゆ、みりん各小さじ1、塩少々を加えて煮含めてから裏ごしする。
3 海老はカラ、背わたをとって細かくきざみ、火にかけ(**b**)で調味し、4等分する。
4 ボールに(**2**)と(**a**)を入れてよく混ぜ4等分し、円形にして(**3**)を中心に入れて丸め型を整える。
5 (**4**)に小麦粉、溶き卵、あられをつけて油で揚げる。
6 ししとうは竹串で差して穴をあけ、さっと揚げ斜めに切る。
7 (**d**)を鍋に入れ、水溶き片栗粉を加えて火にかけとろみをつける。
8 器に(**5**)を盛り、(**7**)を注ぎ、(**6**)を添え、(**c**)を天盛りにする。

＊ししとうはそのまま揚げると破れるので、竹串を差して穴をあける。あられの他にゆばをくだいてもよい。

現代のがき大将を育てたいよね

若葉町で青少年育成に取り組む
山田 拓男さん

於：えくてびあん編集工房
写真：小林 達実

■山田拓男（やまだ・ひろお）／昭和24年（1949）八王子市生まれ。長男の不登校をきっかけにPTAや地域の青少年育成にかかわる。平成10年（1998）から今春まで6期、立川市青少年健全育成地区委員会若葉町地区委員長をつとめ、中学生の主張大会や土曜午後のホリデースクールなどを積極的に進めてきた。現在は保護司として活動しつつ青少年育成にも相談役としてかかわっている。

■芳賀敏博（はが・としひろ）／えくてびあん編集人

芳賀　山田さんと初めてお会いしたのは、昨年の中学生の主張大会で、若葉町の市立第九中学校から教育委員長賞と努力賞をダブル受賞した江戸愛美さん、歩実さんの双子姉妹をご紹介した時でした。そのとき賞をとることだけじゃなくて、九中のほとんどの生徒が中学生の主張を夏休みに書いてくれるのがいいんだとおっしゃっていたのが印象に残っています。若葉町の青少年健全育成地区委員会（青少健）委員長として、子どもたちに書いてもらうために手書きの手紙を配られるって。

山田　青少健の委員長になったとき中学生の主張の応募が少なくてね。これを市内の中学校で一番の数にできればいいなと思った。学校が荒れていたら子どもたちが作文を書いたりしないでしょ。応募が多いのは学校が落ち着いている証拠だと。それで学校に行って「書いてくれた作文は死ぬ気で全部読むよ」と生徒に呼びかけた。最初の年、パソコンで手紙を打って配ったら、書いてくる作文の字がなんともきたないの。読むのに四苦八苦する。そこで気がついた。読んでもらうために書くにはこうするんだよと、こちらがやって見せないといけない。上手な字でなくていいから丁寧な字で書くんだとね。それから手書きで呼びかけの手紙を書きましたよ。ついでに夜中に読むのが大変だからできるだけ濃い鉛筆で書いてほしいとか注文もつける(笑)。数が増えただけでなく、いい作文が多くなって最近は審査員が最終選考に上げる10人を絞り込むのに苦労しています。

芳賀　地域の青少年育成に取り組むきっかけは、息子さんの不登校だったとうかがいました。

山田　直接のきっかけというわけじゃないけど、小学6年の夏に長男が不登校になり、女房がひとりじゃ支えきれないと訴えるわけ。建設会社に勤めていて、それまでずっとあちこち出てばかりで当時は栃木県の宇都宮にいたからね。人に相談しても男の子には父親が大事だというので、希望して別会社に出向という形で自宅通勤に戻してもらった。それで小学校にかかわったのがきっかけ。PTA会長をやってもうそろそろいいかなと思った頃に、青少健はどうかと声がかかった。当時は学校が荒れている時期でね。引き受けてすぐ、これは10年かかると思った。どうせかかわるなら徹底的にやろうと、いろいろな改革案も出し、副委員長を4年、委員長を6年で、やっぱり約10年かかった。その間に下の息子が中学3年の1年間は九中のPTA会長も。

芳賀　僕は子どもが3人いるんですが、次男が一時不登校になりそうな時がありました。先生方がとても良く対応してくれて乗り越えられたけど、恥ずかしながら父親の僕は母親任せで、ほとんど何もしなかった。その子はもう大学生ですけど、今でも申し訳なかったと思います。会社勤めで降格を志願してまで子どもと向き合うというのは、なかなかできませんよ。自分の子でない地域の子どもたちのためとなるとなおさら……。

山田　長男は今大学院に行ってるけど、不登校の原因が何だったのかいまだに言ったことがない。心の傷は完全には消えていないと思う。でも小学校、中学校と剣道をずっとやっていて、そういう仲間とか人とのつながりがあって乗り越えられた。二十歳くらいになって自分のなかで整理がついてふっきれたんじゃないかな。当時は不登校という言葉さえ禁句に近くて、学校にどうしてなんだと聞きにいっても「子どもさんが弱いから」と。学校からちゃんとした答えを聞くにはPTAをやるのが一番だと言われて、それでPTA会長をしたんだもの(笑)。しかし、やってみると学校だけの問題じゃない。年々変わってくる子どもに対応する教師の努力も必要だし地域も応援団として協力しなくちゃいけないが、一番の問題は親。学校に責任転嫁したり、子どもに無関心な親がいかに多いか。

芳賀　よく教育の危機と言われますけど、根っこを考えると本当に奥が深い。変えていこうと思えば、世代単位の時間で考えないといけない。

山田　青少健にかかわって、まず子どもに声をかける挨拶運動を始めた。当時はまだ土曜日に学校があったから校門の前に立って、子どもの顔を見ながら「おはよう！」と。10年続ければ小学1年生も中学を卒業する頃でしょ。何か間違いがあっても顔見知りなら話ができる。若葉町ではけやき台団地の盆踊りの後、毎年子どもたちが集まって遅くまで帰らないのでパトロールをするんだけど、下手に声をかけると喧嘩になりかねない。顔を知っていて「お、○○じゃないか」と声をかければ、たむろしている方も「そろそろ帰るよ」(笑)。11時を過ぎたら帰らせるけど、それまでは「周りに迷惑をかけるなよ」とある程度認めてやる。地域の顔を知っている人の中で育った子どもたちが親になった時には、少し変わってくるんじゃないかな。何かを変えようと思っても急には変わらない。10年かかるというのはそういうことなんだ。今願っているのは、地域にがき大将を作ることなんだけど、これにはもう10年はかかるかな？

芳賀　がき大将なんてなつかしいな。昔はいましたね。勉強ができるとかじゃなくて、駆けっこが速いとか肥後守を使うのがうまかいとか、自然に人望が集まるみたいな。

山田　3年前から土曜日の学校を開放してホリデースクールというのをやっているの。本当は、大人は子どもに居場所を提供するだけで、子どもたち自身が企画して遊んだり小さい子に遊びを教えるようになってほしいんだけど、実際にはなかなかうまくいかない。がき大将を作ればそうなるんじゃないか。何人か候補がいて、彼らにもうちょっと指導力がついて、小さい子の面倒をみてくれるのを期待しているんだ。

芳賀　そういう山田さん自身が、一番がき大将みたい(笑)。

山田　そうそう。昔は八王子のがき大将。小さい頃は背は小さかったけどソフトボールをやって、その後はバスケットボール。でも、がき大将も大人になったら待つことを知らないといけない。僕は自分の子どものことでそれがわかった。僕の親父は生糸の商売をしていて小学校入学前に料亭に連れて行ったり、高校生の時には「男はどうして姿を持つのか」なんて話す。すべて実地教育(笑)。親を大切にするとか、人を騙してはいけないとか、人間として大切なことも自分がそうやって見せて伝えてくれた。今の子どもたちに一番必要なのは与えられる情報より、身をもって経験して得ることだと思う。そのためには親がまずやって見せる。その上であまり規制したり手を出さずに待つことなんじゃないかな。だから、がき大将作りも育つまで待つ(笑)。しばらくは地域の子どもたちを見続けていくことになるね。

錦町	パンと洋菓子 うちのやブルマン	錦町1-18-7 524-9280
	駄菓子・ファンシー むぎばたけ	錦町2-1-1 526-0210
	海が見えるカフェ シーマンズ	錦町2-1-7-2F 523-7407
	美容室 FALCO	錦町2-1-10 528-2389
	諸官公庁御用達・日用雑貨 池田屋	錦町2-1-10 522-3731
	手打ち 更科もとおか	錦町2-1-27 528-2345
	しゃぶしゃぶ・鍋料理 しゃぶ・りん	錦町2-1-33-3F 527-2228
	スペイン料理 TAPAS	錦町2-2-29 529-0733
	Bakery Cafe Crown	錦町2-4-2 526-2226
	三田花店本店	錦町2-5-23 524-4187
	(有)朝日屋酒店	錦町2-6-12 525-6333
	にしやま薬局	錦町2-7-8 525-9212
	パスタの店 パセリ	錦町3-1-21 525-8486
	アミューたちかわ	錦町3-3-20 526-1311
	多摩中央信用金庫 錦町支店	錦町3-6-9 528-0511
	そば処 高尾亭	錦町5-5-31 522-2710
	Natural Food Restaurant シェいなば	錦町5-19-9 529-5921
	リストランテ ラ・ポポラリータ	錦町6-9-25 527-3880
	高齢者総合施設 至誠ホーム	錦町6-28-15 527-0031
羽衣町	韓国居酒屋 木浦館	羽衣町1-18-1-1F 527-3006

えくてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります

今月は 錦町・羽衣町・柴崎町のお店です。

羽衣町	多摩中央信用金庫 東立川支店	羽衣町1-19-6 524-0611
	Cake Studio 35	羽衣町2-6-1 527-6808
	林歯科	羽衣町2-7-10 522-5657
	中島豆腐店	羽衣町2-12-34 522-5732
	フレッシュフルーツ 立川商店	羽衣町2-30-6 522-3565
	本・事務用品 泰明堂	羽衣町2-31-1 522-3353
	文具の ないとう	羽衣町2-33-1 522-3677
	化粧品 OZAWA	羽衣町2-31-1 522-3749
	テーラー安武	羽衣町2-33-11 522-4820
	株式会社 西友 西国立店	羽衣町2-40-1 524-5101
	赤松タバコ店	羽衣町2-42 524-7852
	まごころ銘茶 狭山園	羽衣町2-45-1 527-0146
	蕎麦処 かめ井	羽衣町3-2-17 524-8101
柴崎町	パスタビーノ はしや	柴崎町2-1-6-B1 521-3386
	明誠書房	柴崎町2-1-11 523-6700
	味乃 寿司由	柴崎町2-2-8 522-3733
	株式会社 一心堂	柴崎町2-2-16 527-3777
	すがの歯科	柴崎町2-2-16-2F 540-2675
	紙匠 雅	柴崎町2-2-19-1F 548-1388
	ビストロすぎ浦	柴崎町2-2-23-1F 525-9929

写真：小林達実

風になった夏

国立競技場で走った

オリンピックイヤーの7月24日、
国立競技場で第20回全国小学生陸上競技交流会が開催された。
6年男子100m東京都代表、幸小学校6年の竹中祥君。立川っ子が力いっぱいトラックを走った。

全国大会100m予選4組

レースを終えて

全国大会で指導の水車正さんと

気温32.5度、湿度54%、時間の経過とともにさらに暑くなっていく競技場。地区予選を経て全国から集まってきた966名の小学生アスリートたち。苛酷な条件の下で記録を競う。

6年男子100m予選4組、静寂の中、熱い風とともに号砲が鳴った。東京都代表の紫色のユニフォーム、ゼッケン13番、竹中祥君が走る。自分の力を信じて、走りきった。

幸小学校6年生。若葉町陸上部に所属している。水車正さんと北条光男さんが27年間指導を続けているクラブチームだ。「昔子どもはみんな運動ができた。最近はスポーツに関心のある子はどんな競技にも積極的に参加していく。やらない子はまったくやらないし、またできない」と水車さんは言う。祥君も、陸上だけでなくサッカーでも活躍している。100mで東京都の代表になったのは昨年に続いて2回目。昨年は準決勝に残った。

この日、祥君は惜しくも準決勝進出はならなかったが、自己ベストを更新して13秒23の記録を残した。少し悔しそうな祥君の笑顔が印象的だった。

けやき台小学校での練習

若葉町陸上部のみなさん
右端 水車正さん
左端 北条光男さん

常楽我浄
真如苑提供番組<じょうらくがじょう>
スカイパーフェクTV 216ch、マイ・テレビ 84ch
土　曜　午前9時～9時15分
　　午後7時15分～7時30分
再放送／火曜　午前9時～9時15分
　　午後7時45分～8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。
立川に育てられて六十八年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

FROM CHUBU
フロム 中武
■営業時間 am10:00～pm 8:00
〒190-0012 立川市曙町2-11-2
Tel. 042-524-7111(代表)

私たちは「と」のための会社です。
人と人、企業と企業、企業・商店とお客さま……
いろいろなコミュニケーションがあります。
私たち大廣社は、この「と」を的確に、迅速に、効果的に、
行なっている会社です。
と
大廣社は、企画デザインから
印刷加工までを自社内で行っています。
PLANNING・DESIGNING
PROCESSING・PRINTING
㈱大廣社
042-527-1911
〒190-0022
東京都立川市錦町5-17-13
FAX.527-1949
E-mail info@daikousya.jp

えくてびあん流

現代に訴える40年ぶりの再出版

細江英公人間写真集『おかあさんのばか』

えくてびあんの表紙を飾っていただいている写真家、細江英公さんの最新写真集が、静かな感動の輪を広げている。

東京五輪のあった1964年に新聞掲載された小学生、古田幸さんの亡き母への詩。当時大きな反響を呼び、詩集のほか映画やレコードにもなった詩と、古田さん一家を細江さんがドキュメンタリーとして撮影した。英訳した詩と写真による写真集『Why, Mother, Why?』にまとめられたが、海外でしか紹介されなかった。

細江さんの自伝をまとめる過程でその存在を知った窓社社長、西山俊一さんの手で新たに編集、再出版されたのがこの写真集だ。「40年前の写真なのに古びていない。肉親を失った少女の悲しみや家族への思いが胸に迫ります。人と人の繋がりが失われている現代にこそ出すべきだと思いました」と西山さん。細江さんにとっても『薔薇刑』『鎌鼬』と同時期の重要な仕事であるだけでなく、<細江英公人間写真集>を謳った新たな出発の写真集でもある。写真展用パネルの貸し出しにも応じている。

細江英公人間写真集『おかあさんのばか』
価格：本体2200円＋税
問い合わせ：窓社（電話03-3362-8641）

この人この店 ⑮

CHAINESE DINER
陶　桃（タオタオ）

オーナーシェフ　柏柳 昌徳さん

1000円のコースランチ　ドリンク付き
（コーヒー、紅茶、ウーロン茶から選べます）

「また食べたい」より「毎日食べたい」味だと聞いて出かけていきました。武蔵砂川駅から徒歩で10分、日産自動車工場跡地の西側にオレンジ色っぽい建物があります。そこが陶桃（タオタオ）。高級感あふれる雰囲気、高そうだなあと思ってメニューを見ると、ファミレスと変わらない。それなのに何を食べても満ち足りてしまう。「シェフは素材にも仕込みにも手を抜かないんです」と奥様。「おいしい時間を提供したいと考えています。味も雰囲気も接客もすべてでおいしい時間なんですよね」。奥様のおっしゃるとおり、きびきびとしたフロア係の動きや目配り気配りが気持ちいい。25年以上のキャリアを持つ職人シェフの気概を感じながら、おいしい時間を満喫しました。

〒190-0033　立川市一番町4-57-1
TEL 042-531-3100
営業時間　11:00～15:00
　　17:00～22:00
定 休 日　毎週月曜日

写真：五来孝平

タチカワ誰故草（たれゆえぐさ） ⑮

見るに心の澄むものは

森　忠明

『わが梁塵秘抄』（堀越孝一氏著・図書新聞）を北口の中央図書館で借りたのだが、私の一番好きな歌〈見るに心の澄むものは、社壊れて禰宜も無く、祝無き、野中の堂の又破れたる、子生まぬ式部の老の果〉が選ばれてなくて物足りなかった。

本誌八月号は立川市有形文化財『立川村十二景』を紹介していたので、今回は〈見るに心の澄むもの十二景・森忠明選〉をお届けしたい。

既に選者は、駅弁コーナーの観音様みたいなおばさまと、パレスホテル立川のスタッフと『えくてびあん』の存在を、我が街に過ぎたるものとして記識ずみであるから、あとの九景を順位無関係に。

第四景――たましん本店ギャラリーにおられる美術担当の関口女史。この麗人の博覧強記ぶりと品位の高さは、やはりタチカワには勿体ないレベルのものです。

第五景――喫茶店エミリーフローゲのウェートレスの皆さん。どこから探してくるのだろう、あんなに感じの良い女性を。店長、白武氏の静居と静語に心安らぐ。

第六景――月賞堂印房の御夫妻。おふたりとも精緻で美しい仕事をされる。おこられるかもしれないが、ここの御主人と接するたびに（梁塵秘抄編纂者・後白河院とは、こんな感じの人物だったんでは）と思ってしまう。

第七景――ルミネ1Fの三田花。タチカワの生き字引、三田鶴吉氏の店だけあって、従業員が商品知識深く、草木の扱いも優しく丁寧。サカキに〈お〉を付けているのもいい。

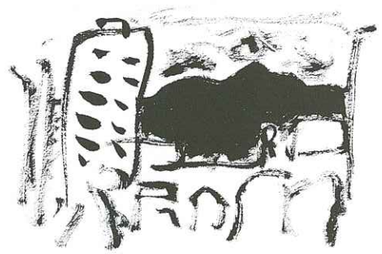
第八景――真如苑信徒の方々の早朝市内清掃。愛欲や遊興を目的に始発電車で出発しようとする時など、駅前で黙々と作業する彼らに出会うと、心が澄む、というより「済みません」と頭をさげたくなる。

第九景――吉岡ひろ女史とその彫刻作品。『かぐや姫』には（チキショウ、いいなぁ）と唸るほかない。大家なのにとてもお茶目。

第十景――ファーレのオブジェ群。盗みたくなるような傑作ばかり。しかし過日、古本屋さんでそれらを特集した雑誌を見かけ、ひらいてみたら地元タチカワの人間に書かせたり語らせたりしていなかった。現代美術にはローカルを軽侮するの謂もあるのか。置かせてもらっている脚下の歴史や地祇的なものとの関わりを照顧しなくちゃ。編集者やプロデューサーらのエリート主義を感じた。

第十一景――フロム中武の屋上。高校時代のGF、岩田由利子が好きだった場所ゆえに。享年四十五。独身のまま〈子生まぬ〉まま、乳癌で死んだ無口な佳人は、あそこのベンチでひとり何を考えていたのだろう。

第十二景――大岳山。あのトンガリは何故か愛しい。心ひかれる無人島に読んでもらいたくて書状をしたためたという明恵上人にあやかり、私も大岳山へ詩でも捧げよう。



挿画：野崎義成

表紙の人

岩部 定男さん（一番町）

残堀川に近い一番町の住宅地に岩部定男さんの自宅兼美術書の出版社・形文社がある。美術とその本との関わりは長い。武蔵野美術学校卒業後イラストレーター、編集者として大手出版社でヨーロッパ美術史的な仕事や、恩地孝四郎、石井鶴三の作品集、全集の編集にあたり、1987年に形文社を設立した。企画から取材、編集をひとりでこなし、アーティストや研究者、学芸員らから信頼も厚い。確かな眼と丁寧な仕事で英国ロマネスク美術やイタリア未来派など、大手では扱わない優れた本を次々と世に送り出している。

昭和記念公園で　写真：細江英公

かたこと

まずお詫びです。9月号表紙の人、伊藤光則さんのご住所の見出しが間違っていました。砂川町に訂正いたします▼暑さ寒さも彼岸まで。晴れあがった秋空に風が涼しく、日々長くなる夜もまだ寒くはない。穏やかな季節です▼稔りの秋、芸術の秋、スポーツの秋、食欲の秋……花の春や初夏新緑も人に愛されますが、秋は体や眼や胃袋に直接ドシンと響くようです▼えくてびあんも本号は<げんき産直>でじゃがいも、<郷愁への旅>には熟れた柿の実、<この人この店>の「陶桃」と、美味しそうな秋が集まりました▼<VIEW>は陸上競技男子100mで全国大会出場の竹中祥君。決勝進出はかなわなかったけれど東京五輪や世界選手権が開かれたトラックを東京都のゼッケンを背負って走った経験は大きい。この夏がんばった多くの立川の子どもたちの代表として、大きな拍手を送ります▼対談をさせていただいた山田拓男さんは、地域の子どもたちがまっすぐに育っていくことに情熱を傾けています。大人はつい子どもに指図してしまいますが、山田さんは昔のガキ大将そのままに、子どもの目線なのです。そして「待つことが大人の役割です」とも▼<えくてびあん流>細江英公さんの写真集に、少女が七輪でサンマを焼いている写真がありました。かつてはどこでも見られた秋の風物詩。なつかしいなぁ。（芳）

スタッフ
編集　大久保清志／清水恵美子／中薗子
デザイン　池田隆男（WATER DESIGN ASSOCIATES）
　　AMNET design factory
写真　小林達実／五来孝平

えくてびあん (C) 10月号
第23巻　通巻239号
平成16年10月1日発行
発　行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082　FAX 042-528-0065
編集人　芳賀敏博
発行人　加賀悦也
印　刷　(株)大廣社

無断転載を禁じます。

郷愁への旅

乗兼広人 銅版画［3］

「秋の里山」

2002年 35.0×23.0cm　2版3色

ＮＨＫで放送された「鉄道１万２０００キロの旅」という番組が予想外の人気を呼んだという。新幹線や高速道路の時代に、各駅停車のスローな旅に郷愁を覚える人が多いのだろう。目的を定めずに訪れた土地で思いがけず出会った人、出会った物・風景への感動は大きい。それが旅の味わいでもある。

掲載作は尾瀬の北東側、南会津伊南村で出会った茅葺きの納屋である。雪に備えて頑丈な造りのこのような納屋も消えつつある。そして農家ごとに植えられた柿。郷里の広島には焼酎で渋を抜くとすこぶる甘い西条柿があるが、明るい柿の実の色はふるさとを思い出させる色だ。

中学生の頃、三原出身の洋画家、池田快造の回顧展が地元の銀行で開かれた。それを観て絵描きになるとひとり決めて勉強そっちのけで絵にのめり込む息子を怒りもせず、油絵の先生を捜してきてくれた父はどんな思いだったのだろうか？ 父が亡くなってから、そんなことを考えることがある。